

「中国古典美術の魅力」特集にあたって

編集部

本特集では、二一世紀に中国古典美術が持つ価値を考えてみたい。もちろん「過去の遺物」として忘却することを勧めるつもりはない。中国美術はモノとしての優秀さに加え、十分な作品量、鑑賞機会の利便、そして鑑賞の蓄積といった条件を満たし、復活の契機を待っている。中国美術という豊饒の海が、実は目前に横たわっているのである。

本特集では、中国美術に正面から向き合い、その魅力を真摯にとらえなおしてみようと思う。

TVコマースシャルのように一瞬の脇見で目を引かずとも、腰を落ち着けてじっくり時間をかけて接することによって享受できる楽しみがあれば、それにも目を向けよう。西洋美術の遠近法に照らし返ってくるっているように見えても、画中に入り込んでその中で時を過ごせば新しい世界が開けるかもしれない。もしそうであるならば、画中への入り方を探ってみよう。

プロのアーティストでない我々も、もし筆を執って墨を紙に載せることに楽しみを見出しうるのであれば、その楽

しみを見つめてみよう。

暗い堂の中で仏像の視線に心を射すくめられた体験があれば、その意味を考えてみよう。

時代と地域の懸隔のために、そして契機が得られないために見失われがちな中国美術のすばらしさを、叙述の量は十分でなくとも、視野の正面に据えて語ってみようと思う。固定的・保守的ではなく、深い見識と洞察に基づいた、自由にして奥の深い視線の向け方が存分に開陳されるであろう。

座談には、中国美術を研究する方に加えて、美術史を専門としない方々にもあえてご登場いただいた。美術史は、作品を楽しむための唯一にして、絶対の手段ではない。独自の、個人の立場から中国美術の楽しみを熟知する先達、その魅力にとりつかれ、深く愛する方々の話は、素人の一鑑賞者としてスタートする読者諸氏にとって、大きな導きとなるであろう。

つづく論考では、中国美術研究の専門家に、二一世紀に

おける各ジャンルの美術が持つ意義を語っていただいた。歴史とジャンルと地域の視点である。板倉論文は、現在のような「中国美術」観の成立を美術全集と展覧会という視点から語って、作品を追いかけるだけでは見えてこない時代の本質が明らかにされる。下野論文は、長い伝統をもつ「書」を、コンピュータ時代という環境に焦点を当ててとらえている。山名論文は、古典東洋的な価値観からは外れていた仏像という彫刻ジャンルを、日本の近現代における展開からとらえている。藤原論文も、近代日本人の中国古典美術理解を、こちらは古銅器を中心に語っている。

クルナス論文は、西洋の視点が中国古典美術をどのようにとらえているのかを語っている。文中でも明確に語られているように、「中国美術」というくくり方は、西洋に起源をもつ。現に、日本で刊行された「中国美術」全体をカバーする書籍は、ながくマイケル・サリバンの『中国美術史』だけであったことが思い起こされる。それだけ現代日本人のとらえ方は、西洋的性格を持つといえよう。西洋人がそれをいかに自覚してきたのかしなかったのか、極めて興味深い論考である。ちなみに、本稿はクルナス氏の著作 *Art in China* のイントロダクション部分の翻訳である。最後に載せた澄懷堂美術館紹介は、美術史を長く支えてきた蒐集家の活動を詳細に記述している。作品の優劣だけで美術が進んでゆくわけではない。美術の大きな動きをとらえ

るための必須要件として、時の文化人の広範な活動を、経済活動も含めて記していただいた。さらに小文ながら示唆に富む文章として、学校美術教育における中国美術鑑賞の位置づけを語っていただいた。文中にもあるように、現在の美術教育では、鑑賞、とりわけ中国美術の鑑賞は重視されていない。これからの展開を望むきっかけとしたい。

最後に中国美術に接することが可能な美術館・博物館案内を載せた。大いに利用していただきたい。(木島史雄)